烽火

No. 10
（関西）共産主義者同盟政治機関紙
編集発行人・安達　元
連絡先・京都市上京区烏丸今出川　同志社大構内　京都府学連気付

万国のプロレタリアート団結せよ！
戦闘的労働者・学生は共産主義者同盟に結集せよ！

憲法闘争に集約させよ
―反動的停滞的状況の打破

深刻化する過剰生産と市場問題

固着的な、極めて反動的な状況が我々の前にある。あたかも安保闘争のあとに池田内閣が経済政策で迂回し、大衆にギマン政策で対決したごとく、日韓問題の失敗を前にして池田内閣は低姿勢のポーズにある。にもかかわらず日韓も改憲も独占資本の国家的政策として着々と準備されつつあり、それ故に固着的な均衡状況は本質的に反動的である。

経済政策が当面の政治的問題の中心となっているのは、また独自の原因もある。即ち自由化段階において日本経済が設備投資中心型から、輸出、公共投資に中心をかえつつあること、しかもその内部に過剰生産的契機をはらみつつあることはすでに周知のことである。独占強化をめざした新産業秩序の確立も難行してはいるが企図され、日本経済の近代化も「中基法」などにもりこまれている。地方選挙は中央直結（新産業体制にあわせた地方経済）か、住民の生活擁護かで争われた。自由化に対して景気後退に対して国家独占がどのように対処するかは、保守党内部でもまだスッキリとしていない。だがこうした独占資本の蓄積の強化はまた予備政策の再編をもうながしているのである。

これらの経済の動きの内部にある基本的要因としての過剰生産は必然的に市場問題の深刻性を喚起し、伝統的な日本帝国主義の本能を露呈しつつある。日韓問題はいわば日本帝国主義の政策における本命である。

だが日韓問題は韓国内部の情勢によって「デッドロック」にのりあげている。

池田内閣の課題

池田内閣は安保闘争のあと、岸内閣のあとをうけて成立した。そして第三次池田内閣の政策的な本命は日韓と経済政策であった。当初は迂回的に経済政策中心であったが、高度成長政策の破綻と小型内閣は、党内右派より"日韓と高姿勢"を要求されたのである。韓国政局の不安定による日韓会談の危機は、そのいみで、国際的な米日の極東政策との関連、及び自民党の来年三月に予定されて総裁公選との関連で、微妙な波紋をひきおこしているのである。

地方選挙における東京の情勢はこうした経済的な、外交的な不安定さを表面にだし、自民党内の分裂を引きおこすかとみえたが、創価学会の動きもあって、一応の自民党体制維持に成功した。だが今年の池田内閣の課題は依然として

①日韓の今後のとりあつかい。
②日韓の日本の帝国主義政策の中での位置。
③改憲問題のスケジュールとのからみあい

にあることに変りない。

闘争方針を明確に

以上の如き政治経済情勢は必然的に労働者階級と人民の生活に対して、物価値上げや、職務給体系への切りかえによる労働過程支配の強化や、首切りを伴なう合理化を継続的に引きおこすであろう。

そしてこれらに対しては賃上げ要求や、職制支配に対する職場闘争や、首切り反対闘争がおこる。また公務員のスト権奪回のためのILO87号批准の闘いもすすむであろう。

ブルジョアジーは最高裁判決や刑法改正など治安問題の準備をもしている。

かくて今後の政局の動きは、当面は日韓問題などを通じ、更に秋には憲法調査会の答申をめぐっての動きなどにしぼられるだろう。

以下日韓問題、憲法問題の現状を検討し、更に反体制運動の現況をみてみよう。

日韓問題と憲法闘争の結合を

日韓問題は韓国内の悪性インフレによる生活難や、民政、朴軍政両方への民衆の不信や、あるいは根強い反共主義の浸透などにより、いまだ韓国としての自決的な基本方向すらこんとんとしたままのような観がある。従って当面の混乱の影響は、韓国内の情勢にとどまらず、国際的なアメリカ帝国主義の世界戦略との関連で、日本帝国主義の新らたな役割との関連で、大きな意味をもつであろう。日韓問題が日本帝国主義の市場問題や今後の帝国主義政策のプランにおいて占める位置は大きい。それ故このコースでの動きは当然年内に表面にでて、政治問題化するだろう。しかし急激な動きの中ではまだアメリカの動きも重要な役割をもつだろう。

我々がこの闘争を展開する場合には、当然日本帝国主義の新らたな役割に対する闘いを中心の内容とする。かくて日韓闘争に対する闘いは、憲法、特に第九条に関する、海外派兵に対する闘争に進らなってくるのである。

憲法闘争の位置づけ

憲法改悪は安保（一九五二年）ーと安保（一九六〇年）との間に提起され、更に安保（一九六〇）ーと安保（一九七〇）との間にいよいよその総括段階に入るものとみられる。次期の安保に日本帝国主義の野望をかけるためにも憲法による所の日本帝国主義の武力面での計画の完成は重要な、具体的なプログラムとしての意義をもつだろう。またそれは安保闘争へのブルジョアジーの反省からもでてくる。

改憲への動きは戦後

第一段階　憲法制度における抵抗
第二段階　第九条と自衛隊を中心とする空洞化
第三段階　条文改正まで含む反動過程の完成

として描きだせるだろう。また独占の集中度、新産業体制の要求といった段階は行政権の強化を憲法に望み、例えば首相公選制の論議がでている。

また他方、改憲の動きは次の如き要因により具体的な憲法危機をつくりだしている。即ち、第一に昨年の参議院選挙において反対制グループが議席の½を欠いたこと、第二に安保以降、原水禁の分裂などにより闘争主体が見通しのない混乱に陥入っていること、第三に憲法調査会が、改憲を、憲法機能論の立場から改憲への足がかり運動を行なっていること。昨年の公聴会はその表現である。もち論こうした動きは、池田内閣の迂回的政策への自信がまだ残っている段階では、まだブルジョアジーや国民層の改憲へのアセリいわば危機感をも、それほどもりあげてはいない。だが、答申案がだされることは、一気に改憲の情勢をつき動かす要因となるであろう。我々は絶対にこれに対する闘争をくまなければならない。

憲法闘争を始めよ

かくて日韓ー憲法を結ぶブルジョアジーのコースは次のように想われる。

①日韓を池田内閣の手で、ただし憲法調査会の答申は秋に行う
②憲法問題の具体化は次期内閣の手で
③期限は次期安保のまえに
④その前段階としてかなり本格的な"治安対策"にとりくむ

といった四段階である。

このような動きに対して我々の動きはどうか、安保闘争における「のりこえられた前衛」は、その後、原水禁の分裂へ至った。大衆は反動的な均衡状況にある。これはますます分裂を促進する要因である。

原水協の再建　その意義

我々の方向はかかる状況にあっては次の如くなければならない。

まず原水禁運動をより具体的に憲法闘争にレベル・アップしなければならない。特に中国の核実験の予想や、そうした多元化せる世界情勢における日本帝国主義の独自性への闘争をつよめるいみでもかかる観点は必要である。しかもこの運動は、憲法を大戦術とし、（戦後の三段階の改憲の動きは、第一、完全実施と革命憲法への転化、第二、空洞化、反動化に対する護憲、第三段階、改憲阻止といった大戦術が必要であった）ポラリス寄港も、日韓も、これにからませる必要がある。それは独自の闘争として、雪だるま式に大きくして行かねばならない。いわば現在の停滞的、反動的均衡状況、無関心状況を突破する戦術である。

我々はさらにそれにつけ加え、分裂原水禁をのりこえる、改憲阻止国民大会を組織しなければならない。昨年度の「憲研」を再評価しよう。そして憲法闘争の中心の問題点として我々は自衛隊の実態をバクロする必要がある。それは国家権力の問題であり、安保闘争の終末期に無気味な影を映じた武力である。

我々が現在とりくむ必要のある闘いは、以上の如く、さしあたって数年に亘る闘争なのである。

メーデーアピール

1963年5月1日（関西）共産主義者同盟政治局

労働者、インテリ、学生諸君。

われわれは、全世界のプロレタリアート人民と共に、ここに、メーデーを迎えた。

一八八六年五月一日にはじまり、めんめんとうけつがれてきたこのメーデー。

暴虐の嵐の中で、シカゴ・プロレタリアートが失った多くの生命、流したおびただしい血にはじまるこのメーデー。

メーデーは、この一八八六年五月一日のシカゴプロレタリアートの英雄的な闘争を記念して行なわれてきた。

メーデーは、支配階級への、にえたぎるような憎悪と、彼らへの復しゅうにもえたわれわれの同胞によって組織されてきたのだ。

"反権力"という一本の赤い糸が、メーデをつらぬいている。

一九二〇年（大正九年）にはじまるわが国のメーデーも、また、権力との闘いの歴史であった。われわれの同胞は、支配階級のいかなる弾圧にもひるむことなく、メーデーを守りぬいてきた。

東京のプロレタリアートが展開した最初の果敢なメーデー。

ファッシズムの暗黒の谷間でのきびしいメーデー。

終戦直後の怒涛のごときメーデー。

サンフランシスコ講和に反対し、破防法に対決した人民広場の血のメーデー。

このような闘いの歴史をはらみつつ、われわれは、いま、第三十四回目のメーデーを迎えている。

だが、諸君、近年のメーデーを見給え。

われわれは、そこに、"死にひんしているメーデー"を見ずにはおれないであろう。

総評、社会党は、メーデーは、"働く者の祭典"だといって、はばからない。"デモ"ではなく"行列"が組織される。彼らの手によって、階級的決意の日が、祭日に転落させられつつあるのだ。

メーデーは、総評、社会党のダラ幹による「閲兵式」ではないこのことを、われわれは、今日の戦闘的行動によって示さねばならないであろう。

全労、民社の幹部に至っては、メーデーという言葉すらきらい、この日を"労働祭"とよんでいる。彼らは、メーデーという言葉のもつ内容におののき、ふるえているのだ。そのかぎりにおいて彼らはメーデーの意味を正当につかんでいる。だが、賃労働を祝う祭日とは一体何事か！われわれを愚ろうするのもほどほどにしてほしいものだ。

日共、民青は、この日を、"民族民主統一戦線"の強化の日として位置づけている。

社会主義革命の旗を高く掲げて前進しよう

再び不吉な鎌首をもたげつつある日本帝国主義に対して、彼らは愛国勢力の結集をわれわれに訴えているのだ。

海外侵略の第一歩である日韓会談を遂行し、さらに帝国主義的政治機構の確立、強化をねらう憲法改悪を準備しつつある支配階級に対して彼らは、"民族の独立"をつきつけているのだ。

われわれは、帝国主義こそが、何よりも民族主義、愛国主義を欲していること、従って、帝国主義下で民族主義をあおることは、反動的な意味をもつということを、太平洋戦争でいやというほど知らされているし、また、全世界の歴史は、このことを教えている。

日共の民族路線は、単なる"寝言"ではなく"反革命的な寝言"である。こんな寝言をメーデーでしゃべりまくられたのではたまったものではない。日共、民青の諸君、どうか、寝言はねてからにしてくれ給え。

現在、「自由化」というはげしい国際競争戦に突入して、日本ブルジョアジーは、その支配体制の飛躍的強化の必要にせまられている。

文字通り、侵略と抑圧の政策が準備されつつあるのだ。そして、周知のようにそれらの諸攻勢は、憲法改悪に収れんさせられようとしている。

労働者、インテリ、学生諸君。われわれのメーデは、このようなブルジョアジーの階級的攻勢に対する断乎たる闘争の宣言そのものでなければならない。メーデーの革命的伝統は、決して、それを想起することによってではなく、われわれの反権力闘争によってのみ維持されるのである。

労働者、インテリ、学生諸君。

メーデーの戦闘性、革命性を復活させよう！メーデーにその本来の意味を与えよう！

メーデーに結集したわれわれが、ガッチリとスクラムを組み、たくましく前進する時、われわれの前途には、豊かな未来が保障されるであろう。

革命的労働者、インテリ、学生諸君。

ひるむことなく、くじけることなく、日本帝国主義打倒・社会主義革命の真紅の旗をたかく掲げて前進しよう！このメーデーをして資本制社会打倒のトキの声とせよ！第三十四回メーデーの前に、資本家階級をして慄感せしめよ！

われわれ、共産主義者同盟は、諸君と絶えず革命的行動をともにするであろう。諸君の中の最も献身的な最も戦闘的な部隊として戦列の先頭に立つであろう！

全世界プロレタリアートの闘うメーデー万才！

世界革命の旗のもと、革命的労働者、学生は共産主義者同盟に結集せよ！

（関西）共産主義者同盟
政治機関誌
共産主義
・第15号・近日刊
80円〒料20円

■当面する政治経済情勢
■現代資本主義論の検討
■現代資本主義と革命(2)
■創価学会ー若干の考察
■その他

大衆的政治闘争で議会主義を弾劾せよ

地方選挙の結果と我々

(一)

末端政治支配の貫徹

統一地方選挙はその前半をおわった。もともと四年に一度の代議制度の更新期自体に国会議員の場合においても地方議員の場合においても決定的な政治的価値をみつけようとすることはナンセンスな議論であり、むしろこの種の選挙はブルジョワ社会の構造と機能に対する大衆の側よりする大衆の意識構造の一定の反映として考える必要があることをことわっておきたい。

知事選挙と二大市長選挙は大体予想された結果となって終った。農村県、後進県における自民党系知事の圧倒的な優勢、また、そのような地方における革新系の候補者難はブルジョワジーが国家独占資本主義の社会における中央集権的政治支配にどれほど熟達しているがということをまざまざと示している。彼らは地方政界において、大抵の場合、元地主、地方豪家かあるいはそれらから出た官僚たちである。彼らは自己の先祖伝来の財力と学殖と、多少とも中央政界との間におけるコネクションを最大限に利用して、地方自治体の政治を小型日本国政府化しようと努めた。彼らのスローガンが「中央と直結する地方自治」をうたったかは彼らの姿勢が地元よりも中央に向っていたということではなくて、中央の政治の構造と機能をそのまま地方において表現しようとしていることの現れである。これに対し革新系は「住民直結の地方自治」を唱えたが、これはスローガンとして一定のプロパガンダ的要素をもつ、という以上に積極的な意味をみつけることはできない。何故なら今日の高度に発達した中央集権的国家の機能とマス・メディアの威力を一考すれば「中央直結」と対決した「住民直結」がいかに空疎なひびきをもつかということは本能的に地方住民が感知していることである。

(二)

左翼バネは地方議会では微力

一方、福岡県知事、大分、岩手県知事や大阪、横浜市長はいずれも現職の強みか、または対立候補の乱立、あるいは準備不足によって僥倖的に勝利したという要素もあるが、このような大都市中心の地域では組織労働者を中核としてインテリ、都市庶民層の一定の革新ムードが一応曲りなりも存在すること、今日のような天下泰平ムードや相対的安定の時代にあってもジリ貧ではなく一定の上昇傾向にあることを物語っている。日本の労働運動、大衆運動における、一定の左翼バネ、西欧、アメリカのそれとはことなった一定の左への振幅を期待する心情がどのような場所を基盤にして成り立っているかということを考える素材をも提供しているようである。しかしながらこれらの現象を手放して礼讃するわけにはいかない。たとえば都道府県会議員の議席は依然として圧倒的反動勢力の手中にある。福岡でやっと社会党が第一党京都で無所属を含め知事与党がやっと過半数といった程度であり、首都東京はじめ労働者が人口の圧倒的多数を占める大都市においてさえも地方議会になんら労働者に意識は直接的に反映していない。これはさきにみたようなブルジョワジーの中央集権的政治支配が、彼らの巧妙な大衆操作技術によって効果を末端にいたればいたるほど一段と発揮していることを物語っているのである。

(三)

議会主義に終始した社共

これらに対する、プロレタリアートの側よりする反撃の糸口はどのようにしてみいだすことができるだろうか。逆ピラミット型の政治意識の反射はブルジョワジーの大衆意識支配と同じ次元で選挙戦をたたかうことによって可能であろうか。社・共両党の既成左翼はそのような道が可能であるとして一年前からさかんな事前運動を行い、地方議会の獲得における議席が、あたかも革命への一里塚であるかの如き方針をもって、幻想を大衆の間にふりまいているのである。考えねばならないことは、プロレタリアートの政治的結集はどのような指導のもとになされねばならないかということである。一九一七年のロシア革命においてボルシェビキがペトログラード・ソヴエト内の少数派から多数派に転化していった過程は、パンと平和のための徹底的な大衆闘争をまきおこしていった過程であった。レーニンとトロツキーは臨時政府の均衡の下に改良闘争のスローガンをかかげることを断乎として拒否しながら、相次ぐ大衆的ストライキ、大集会を組織し、権力の問題を提起しながら多数派となっていったのであった。国家独占資本主義の下における中央集権的政治支配体制が、地域社会の慣習や、伝統、勢力関係を利用しながら末端まで貫徹している状況の下での地方自治体の闘争は、なおさら徹底的な大衆闘争にうらづけられることがないかぎり、自己目的と化してブルジョアの政治機構にまきこまれてしまうであろう。

(四)

地方自治体闘争の方向

創価学会が日本社会における庶民的感覚をそっくりうけついで都市低所得層、個人企業主を足場にして大きく伸長してきている事実は首都と官僚機構とビック・ビジネスとを骨組とした日本社会の機構の裏からなでかえしにする戦法がある程度の効果をもっていることを示している。共産党が、精一杯のお世辞をふりまきながら、同じ層を求めて、同じような選挙戦術で地方議会に進出しようとしているのもこのような一定の現実的基礎があるからであろう。しかしながら現代革命がすぐれてプロレタリアートの闘争として提起されねばならない必然性をみるならばこのような戦法が如何に現代社会のメカニズムにまきこまれた議会主義に堕落した戦術であるかは当然のこととしてハッキリする。また創価学会が東京都知事選挙において自民党系候補をすいせんしたことは彼らの政治的意図を示しているというよりも、現代社会における非政治的集団が非政治的存在として終始することの困難性を示しているといえよう。同時にそのことは庶民的エネルギーの塊である創価学会の特質である非政治性が即ち驚異的伸張の一つの要因が限界のあることをも示している。これらの庶民的エネルギーの体現者が政治集団に化した場合の危機はドイツにおけるナチズムのぼっ興期ミュンヘン揆、カップ一揆の基盤に酷似している点が注目されるべきであろう。

われわれは全国的政治闘争の課題を提起することによって、社、共の議会主義に対置し、自民党やブルジョワジーの末端支配装置に痛撃を加えねばならない。断乎とした政治闘争—池田政権の政治生命が賭されている日韓会談をプロレタリアートの大衆的闘争によって粉砕し、新産業秩序の確立を中心とした経済基盤のあらたな整備にみあった政治的反動—対暴力法等一連の治安立法、及び憲法改悪を粉砕する大衆的闘争をただちに提起しなければならないが、その方向のみが、地方自治体をコンミューン化させる方向なのである。

書評 ▶トロツキー「我が生涯」

トロツキーを知ろう

スターリンの神話を克服しよう

1

現代は二重の意味において危機である

現代は過渡期であるといわれている。人類は、資本主義社会の打倒と共産主義社会の建設を単に頭にえがいただけでなく、すでに五〇年も昔に、後進国ロシアにおいてはその過渡の第一段階であるところの労働者による国家権力の掌握に、成功したのである。

目をみはらせる表面的な繁栄の裏には、深刻な政治的・経済的諸矛盾が蓄積しており、無政府的な資本主義社会では、もはや巨大に発達した生産力を手なずけることが出来ないこと。そしてこのことは資本家階級すらみとめざるを得ない現代。毎日の新聞に戦争・動乱のニュースのない日はなく、また、労働者の生活のための闘争のたえない現代。これらは現代社会の危機の成熟、移行の条件の成熟をきわめて明白に私達の前に示している。

だが、まさに資本主義社会が崩壊せんとし、最後の繁栄をかざっているかのごとく見える、そのとき、自称共産党が、全然、これに対する処方せんをかけないのもまた現代である。まさしく、現代の危機は二重の意味においてそうであることを知らねばならない。それは、核兵器の出現による人類絶滅の可能性の存在や、資本主義社会の危機にのみを意味するのではなく、未来の社会への展望を十分切りひらきえない自称共産主義の不毛性もまたその一つであり、それは、広汎に存在している危機意識を、小ブルによって組織されるという状況を生みだしているのである。

ナショナルな立場に終始したスターリン

50年前に建設された労働者国家ソ連、それは、世界の労働者階級の前進基地であり、その中枢となるべき任務を課せられていた。戦争において各々の基地やトリデが、一つの戦略のもとに統一して闘うときは、戦力の倍加をもたらすが、そうでなくて各基地がその基地の利害によって勝手に戦闘するときは、味方の戦力はむしろ低下するであろう。全く同じことがソ連についてもいえる。すなわち、ソ連が自らの解放と、世界プロレタリアートの解放を切りはなせないものとして考え、真にインターナショナルな立場に立つ場合、そのトリデは世界革命にとって、きわめて重要な役割をはたすであろうが、遂に、ソ連が自らの国家的利害にとらわれ、ナショナルな立場をつらぬくとしたら、そのトリデの価値の有利さの故にかえって、はかり知れぬ損失を、世界プロレタリアートにもたらすであろう。

不幸なことに、これまでの歴史は、そのトリデが役に立たなかったばかりか、皮肉にも戦闘の武器であるべきトリデが、守るべき財宝として存在してきたことを示している。

2

勝利者は常に正当か

「勝てば官軍」、いう諺がある。政治においては勝者が正当なものとして迎えられるのである。たとえ官軍であろうと、一たん敗北すればそれは賊軍のらく印をおされるのである。それゆえ、政治における正しさ、もしくは正統性は、勝利をもたらすものではなく、むしろ逆に、勝利することが、正当性をもたらして来たのであった。

この政治の論理は、労働者の国家、ソ連をもその例外とはしなかった。レーニンの死後、トロツキーとスターリンのあいだで、ヘゲモニー争いがおこった。支配者の地位についたのはスターリンであり、追放されたのはトロツキーであった。ロシア革命の一切の成果はスターリンに帰し、彼は正統者とされた。一方革命当時赤軍を組織し、英雄視されたトロツキーは、今や、挑発者、裏切り者、スパイのレッテルをはられた。政治のなかで叫ばれるのを聞くかぎり、これ以外のことは聞くことが出来ない。しかし私達は、この政治の論理のカラクリを見破らねばならない。

ソヴィエトが権力を握るや、全世界のブルジョアジーの憎悪の目がそそがれた。先進後の矛盾の蓄積が後進国にシワよせされ、生みおとされた後進国ロシアの革命、これはヨチヨチあるきがやっとであった。自らの前進の条件は、先進国の革命に依存していた。

トロツキーとスターリンの争い

だがこのとき情勢はロシア革命しか生まれなかった。列強に囲まれソヴィエトが孤立するなかで、ロシア共産党はきわめて困難な情勢を迎えたのである。この困難な情勢はたちまち、革命運動の分裂となってあらわれた。それは単に理論の分野の論争といった規模にとどまらず、革命運動の二つの要素である思想力と組織力とに分裂したのであった。思想性をつらぬこうとすれば組織をともなわず、組織を進めれば、思想は歪められる……それほど情勢は困難であった。

この情勢の反映が、トロツキーとスターリンの闘いとして具体的にあらわれた。トロツキーは思想力をスターリンは組織力を代表した。この二つの要素はその後両極にまで分解した。トロツキーはもはや評論家としての自分しか見いだされなかったし、スターリンは、党を秘密警察によって、人民を軍隊によって支配せねばならなかった。そして、スターリンに体現される組織力のみが国際共産主義運動を支配するにいたるや、その不毛さとダ落は、情勢を一層困難なものにしてしまったのである。

3

組織力のみを武器としたスターリン

革命運動は思想力と組織力との統一である。スターリンの組織力は、世界プロレタリアートの血のギセイの上に、労働者国家ソ連を守ってきた。最初は、共産主義の勝利として美化されてきたソ連の建設も、現代では、その正体は、正当に語られるようになりつつある。

一方トロツキーは、自分が敗北し、追放される過程をへながら、自分の思想家としての正当性を示した。トロツキーの思想は、皮肉にもトロツキーの失脚という過程を通じて実現されたのである。

このように見てくるならば、現代革命の成功のためには、トロツキズムの検討が、きわめて重要な課題として残されているといえる。40年も前からトロツキズムへの追害がなされて来たが、思想のない組織力とは必然的にこのように展開されることを知らねばならない。だからといって、スターリニズムの代りにトロツキズムをそのまま移植しても結果は知れている。トロツキズムは不可欠の要素であるにしても、現代革命に解答を与えるだけの包括力がないことを知らねばならない。

4

トロツキーをよまずして現代史を語ることは出来ない

近年トロツキー選集が出版された。12巻にわたっているので、これからトロツキーの研究をはじめる人達には入門として「わが生涯」3巻が適当であろう。ロシア革命の英雄の自伝は、そのまま、きわめてすぐれた革命史でもある。また、スターリン独得の事実の歪曲が、現在でもまだ知られずに残されている以上、トロツキーの目を通したロシア革命の記述はきわめて興味深い。ジョン・リードの「世界をゆるがせた10日間」等と合わせて読まれれば、一層確実であろう。

1905年の革命当時は、ペトログラードのソヴィエト議長をつとめ、そして、1917年には革命軍事会議議長として、最も困難な南部戦線で赤軍を組織し、「トロツキーよりすぐれたボルシエヴィキはいない」とレーニンに語らせたトロツキー。彼が、スターリンとの闘いでいかに敗北してゆくかは極めて教訓にみちている。そういう意味で、これは現代史の理解のための必要不可欠の文献である。

編集言

▼先日、日経連総会が開かれたが、前田事務理事は、その労働情勢報告の中で日く「今年の春闘はたいしたことがなかった」▼この言葉はズバリと、今年の春闘を表現している。春闘への本格的な突入が今年はいやに早いなあと思っていると何のことはない、四月選挙にむけて、早く切りあげるためであったということが、2・15のスト以降みるみる明らかになる始末。三月にもなれば総評、社会党の浮足だつこと、ある組合の執行委員会では、選挙対策の討論が三で、春闘討論は一であったとか。▼三月下旬から、彼らのいいだした「春闘から選挙へ」というスローガンには全くアキレた。彼らは、春闘と選挙を完全に分離している。春闘の徹底的な激化とその闘争を通じての階級的団結の強化と票の獲得という姿勢は、彼らには、全く見られない。▼京都の左京区は、相変わらず、革新票が多い。左京区は、学者、上級サラリーマン、インテリ等の多い所であるが、そこで革新票が最も多いとは"不可思議な話"。それに反して、労働者街では、思うほどに革新は強くない。最近の社会主義とやらは、真にそれを必要としない階層によって支持されている？！？。▼革共内部の党派闘争は、どうやら分派闘争に移行した。全学連中央執行委員会が二つも出現する有様で全く面喰う。それにしても、彼らの論争の内容は、安保直後の新左翼内の論争と全く同じである。あの混乱を"革命的に止揚"したような顔をして、革共同にいった諸君は、実はそうではなく"乗り移り"にすぎなかったということを今、自己暴露した。安保の挫折を自己の挫折として主体的にとらえ、たとえ苦しくてもやはりそこから出発しなければならないのだということを、中核派の諸君は、二年有半にしてようやくわかったのだ。"乗り移り"きれなかった中核派の諸君。オメデトウ？。▼社会主義学生同盟は、去る四月二十日、新入生向けのブランケット版八ページのリーフレットを発行したし、また、社学同の全国化も進みつつある。社学同の前進万才！。

(関西)共産主義者同盟政治機関紙

烽火（半月刊）

・バックナンバーあり
・一部十円・半年百二十円
・〒料八十円